地域サロン活動を通した学生の学修効果について

On the effects of student learning through community group activities

太田　茂美

要約

本稿は、学生がＳ市Ａ地区にて開催されているサロン活動を体験後、学生自身でレクリエーションを考え、サロンに再訪問しレクリエーションを実践した学修の報告となる。サロン活動に参加されている方が望む活動（レクリエーション）が何かを調べ、学外において学生自身が支援提供（レクリエーション）を行った。

サロン活動の体験、支援提供を通して①学生の地域に暮らす高齢者に対する意識の変化、②その実践を通して学修することの意義と課題、また③将来介護福祉士として施設において生活支援を行う際には何が必要なのかということの学生の理解について考察した。結果として①「高齢者と学生との交流は必要で地域活動は活発にしていく方が良い」という意識の変化がみられ､地域活動に参加することが②「その人が望む生活を描く力の基礎力となる」という意義があり「教育内容を検証し、人材の基礎力育成の質を高めていく事」ことが課題であることがわかった。また介護福祉士として③「施設利用者の生活支援において、地域高齢者の個別性をしる必要がある」ことの理解を深めることができていた。

【キーワード】
高齢者　サロン活動　体操　交流
レクリエーション

Ⅰ．はじめに　研究の背景と目的

内閣府が発表している「令和２年版高齢白書」によると、令和元年（2019 年）での総人口は１億 2617 万人、高齢化率 28.4％、15 ～ 64 歳人口 7,507 万人となっている。その後、わが国の高齢化率は上昇を続け 2065 年には 38.4％、総人口は 8,808 万人まで減少し国民の約 2.6 人に１人が 65 歳以上の者となるとしている。また高齢化と同時に 15 ～ 64 歳人口は減少を続け 2065 年には 4,529 万人になると推測されている。2015 年には 65 歳以上の高齢者１人に対して現役世代 2.3 人で支えている状況が、2065 年には 1.3 人まで減少する見込みであり、その負担は大きくなることが推測されている。[1] よって将来において介護が必要な高齢者が増加するのか、それとも健康寿命を延ばすことにより元気で自立的な高齢者が増加するのかが、これからの重要な課題とされている。

以上のように、わが国は高齢化率が高く多様な課題を有している。高齢者が安心して住み慣れた地域で暮らすことが出来る様に、介護が必要となる前から介護予防をすることが重視され 2015 年の介護保険の改正により、既存の介護事業所による既存サービスに加え、NPO、民間企業、住民ボランティア、協同組合等による多様なサービスの提供が可能となり介護予防を充実させることとなった。[2] このような状況の中、社会福祉協議会では高齢者が誰でも、楽しく、気軽に集まれる地域での交流の場としてサロン活動を展開している。森によるとその展開数は「サロンとは 1994 年より社協福祉協議会が中心となり進める事業であり、2012 年４月時点で全国に 60,000 ヶ所を超える設置数となっている」森（2014）という状況である。また、その効果としてサロンでは高齢者の生きがいつくり、仲間づくり、閉じこもり防止、介護予防などに効果があるとしている。[3]

本学の介護福祉専攻の学生は卒業後、施設において介護福祉士として高齢者の生活支援を担うこととなる。そのため、これから介護を必要とする人を支える専門職を目指す学生が実際に高齢者と触れ合い、その思いや考えを知ることは非常に重要である。

なぜなら、高齢者の施設入所前の、思いや生活を知ることが、施設に生活する高齢者の生活の連続性の理解に必要だと考えられるからである。よって、サロン活動を通して、地域に暮らし生活する高齢者の思いや考えに触れることにより何が生活支援活に大切なのかを考えること、また学生自身がサロン会員に支援（レクリエーション）提供の経験をすることで、卒業後の介護福祉士としての生活支援に活かすことが出来るのではないかと考えた。

そこで本研究では、学生が地域社会に出てサロン活動に参加することによって、学生の高齢者に対する意識がどのように変化するのか、その実践を通して学習することの意義と課題、また将来介護福祉士として施設において生活支援を行う際には何が必要なのかということの学生の理解について考察することを目的とする。

Ⅱ．研究方法

(1) 調査対象者

①S市A地区で活動している「サロン会員」
　1回目訪問24名、2回目訪問16名
②介護福祉専攻1年生16名

(2) 調査方法

①サロン会員
（ⅰ）サロン活動（100歳体操）のアンケート調査
（ⅱ）レクリエーション活動（風船バレー）後にアンケート調査
②学生
（ⅰ）サロン活動体験（100歳体操）後にアンケート調査
（ⅱ）レクリエーション活動（風船バレー）後にアンケート調査

Ⅲ．結果

(1) サロン訪問までの事前学修

介護福祉専攻1年生前期、「介護の基本A」の授業において、「介護を必要とする人の理解」として生活の理解、生活空間の理解、生活周期（ライフサイクル）の理解等を、「介護を必要とする人の生活を支えるしくみ」としてフォーマル・インフォーマルサービスの基礎をテキストと配布資料を使用して学修を行っている。この期間の学習の総括として「生活支援において重要なことは、現在の身体的・精神的な状況を把握することに加え、現在や過去の生活歴、家族や生まれ育った地域など、個別の多様な生活（個別性）を理解することが重要である」としている。この内容は、介護実習における「利用者の理解」のために必要な、基礎的な考え方である。学生にはサロン活動参加の目的を、これまで授業で学んだ「利用者の理解」を深めるためであること、レクリエーション活動とアンケート調査を通して「高齢者の地域生活と個別性について理解を深めること」であると説明している。

以上の事前学修を踏まえた上で、地域のサロンに参加しその活動を経験することとした。

(2) サロン訪問のための企画立案

サロンへの参加は、教員からサロン主催者に学生のサロン参加の趣旨を説明した。また、訪問スケジュール等についても事前に打ち合わせを行い、協力を頂いている。

学生はサロン訪問前に授業において、このサロンの活動である「いきいき100歳体操」について、調べている。その内容は、「90歳を超えてからでも体力をつけることができる」という内容で、調整可能な重りを手首や足首に巻きつけ、椅子に座ってゆっくりと手足を動かして筋力をつける30分程度の体操であることがわかった。その効果として、筋力がつくこと、筋力がつくと体が軽くなり、動くことが楽になる。また、転倒しにくい体になり、骨を折って寝たきりになることを防ぐことができる等であり、週一回の介護予防体操として取り組んでいるということであった。インターネット上に動画もあり、その様子も事前に確認している。

アンケートはサロン参加の動機やきっかけ、体操の感想等について2種類作成した。活動参加の際は、学生が主体的に取り組むことができるように、始まりやお礼のあいさつ、アンケート調査の質問者・筆記者、アンケート回収等の役割を学生同士で話し合いながら決めている。

(3) 1回目サロン訪問とアンケート調査

訪問当日は約24名の会員が参加していた。体操の前に、サロン主催者がレクリエーションを一つ披露し、会場が笑い声や笑顔があふれ和やかな雰囲気

となった。その後「100歳体操」をサロン会員と共に取り組んでいる。ＤＶＤを見ながら、椅子に座り、手や足を動かし、ゆっくりと立位や座位を繰り返すのだが、ゆっくりであるがゆえに足・腰にかかる負荷が大きい動作もあった。「100歳体操」を体験した後にサロン会員にアンケート調査を実施している。アンケート①（資料1）は、年齢、性別、活動を知った媒体やきっかけ、参加頻度と体操の効果について本人にアンケートに記入をしてもらい、アンケート②（資料2）は10名の会員に100歳体操の魅力とその理由、体操をしてよかったこと、これからやってみたい活動について、学生が会員に直接質問しながら調査している。参加会員全員に聞き取り形式のアンケート調査を行いたかったが、学生の人数は限られているため、事前にサロン主催者にご協力いただき会員から人選をしていただいている。また、2回目の訪問を10月に予定していたため、再訪問の際に学生と一緒にやってみたいレクリエーションは何があるかについても質問している。アンケート調査の時間は、学生とサロン会員共に、笑顔や笑い声が多く和やかな雰囲気で取り組むことができている。

(4) アンケート調査の分析とレクリエーションの作成

1回目訪問の後､学内授業にてアンケート①･②（資料1・2）の各項目を模造紙に転写し、その内容を学生全員で検証している。アンケート①からは､「体を動かしながら楽しく一緒に取り組めて友達ができること」､アンケート②からは活動内容としては「体を動かすこと」がサロン活動での会員の楽しみや喜びである事を読み取り、レクリエーションのテーマとして「学生とサロン会員が一緒に体を動かし、楽しく取り組めるレクリエーションを考える」ことを導き出している。導き出したテーマのもとに、数種類のレクリエーション案が浮かび話し合いの結果、「がんばらんば体操」と「風船バレー」の2種類を実施することとなった。レクリエーション計画を進めていくうちに、ゲームを行う時間が30分も無いことがわかった。移動時間や準備時間、挨拶、片付け等、計画を進める中で時間が限られていることに気づき、活動の内容を「風船バレー」だけの実施に変更している。学生16名、サロン会員は約20～25名の約40名弱のレクリエーション活動である。その活動を30分以内で納めるには、事前準備をしっかり行う必要がある。また、レクリエーションの後には、その活動の振り返りの為に、サロン会員にアンケートを取ることとしている。そのため、役割分担を行い全員の協力が必要である。司会進行、体操係、風船バレー係、誘導係、道具係、アンケート係、片付け係等、役割を決めて取り組んでいる。授業の中で、それぞれの担当学生が役割を果たしながら取り組めるように工夫を行い事前リハーサル等も取り組み準備を行っている。風船バレーの内容に関しては、安全に取り組めることを第一に、椅子に座って行う事､大きめの風船を用意すること､ネットに引っかからない工夫等を話し合って作成している。

(5) 1回目訪問後の学生の感想

学生はサロン活動参加後、振り返りアンケートを記入している。（資料3）活動の振り返りからは、高齢者が元気に楽しく活動に取り組む姿を、学生がうれしく感じ、サロン活動に意義があることを感じていることを見ることができる。

活動に参加する前は「活動に参加する前、100歳体操について、どのような印象がありましたか」の質問に対して「どんな体操なのか、どういったことをするのかと思っていた」などの意見がある。訪問前にその活動の内容を調べて参加しているが、実際に体験する前は、約1/3の学生が漠然としたイメージだけであることがわかる。「100歳体操をして、どのように感じましたか」の質問には「学生でもきつく感じた。重りを付けたのは初めてだった。体操をされている方はイキイキしていた」と答え「地域の高齢者と話をして、どのように感じましたかの質問」には「80歳でも、まだ運動したり、料理したり、とても元気だと思った」等、その感想や思いを具体的に述べることが出来ている。

(6) 2回目サロン訪問とアンケート調査

2回目のサロン訪問において､考案したレクリエーション（風船バレー）とアンケート調査③を実施している。当日は活動時間が限られているため、サロン主催者にサロン会員を、事前に4つに班分けしていただけるように教員が依頼している。

1回目の訪問におけるアンケート調査の結果､「体を動かすこと」の希望が多く「風船バレー」を学生で話し合って決めたことを会員に伝え、活動の後の

アンケート調査への協力をお願いしている。司会進行学生が会を進め、体操係の学生が考えた椅子に座ったままでできる準備体操を、見本を示しながら行っている。高齢者でも安全にできる様に、体操をすることで体調の変化等ないかを確認しながら実施している。次に風船バレーの担当学生が、実際に試合のデモンストレーションを示しながらそのルールを説明している。ルールとしては、椅子に座って行うこと、サロン会員と学生の合同4チームを編成し1チーム8名程、1試合8分、2試合実施して一番点数を取ったチームが優勝、優勝チームには学生手作りの“レイ”をプレゼント、などを説明している。体操のあとに、風船バレーのコート準備が同時進行するため、道具係が、ルール説明と同時進行でバレーコートを設営している。約30名の参加者がスムーズに移動・転換できるように、司会者の進行のもと、ここでは誘導係が事前の練習を元に役割を果たしている。試合が始まるとサロン会員を中心に非常に熱気がある試合となった。椅子に腰かけての試合をルールとしていたが、その熱中のあまり椅子から立ち上がる様子があった。楽しんでもらうことを第一にルールを決めていたので、ボールに触る回数や椅子からの立ち上がり等には細かいルールはなく運営をしている。大きな歓声や笑顔の中で、レクリエーションは大変盛り上がっていた。優勝チームの皆さんは大変喜ばれ、また学生の手作りの“レイ”も喜んで頂くことができた。

風船バレー終了後、司会者の誘導ですぐにアンケート調査に入っている。約10分間のアンケート記入の間に、それぞれの係が道具類・椅子等の撤収と現状復帰を行っている。アンケート係は用紙配布、質問対応、回収等の役割をおこなっている。会の最後には、学生からお礼を述べ解散している。

(7) レクリエーション効果についての検証

2回目訪問後、学生が実施したレクリエーションに対する、サロン会員へのアンケート調査③（資料4）を集計している。アンケートの結果、学生考案のレクリエーションは楽しんで頂き、また学生と一緒に活動をしたいという内容であった。

(8) 2回目訪問後の学生アンケート

2回目訪問後に学生アンケート②（資料5）を実施。「学生で考えたレクリエーションをしてみて、どのように感じましたか。また、会員様はどのように感じられたとおもいますか」の質問には、「学生みんなで考えて楽しいと感じた。会員さんは楽しんでいるように感じた」「会員さんが喜んでいただける様子を見てうれしかった」等の意見が多数あり、自分たちで考えた事を実践し、その内容を喜んで頂けたことに学生自身が喜びを覚えていることがわかる。「今回、レクリエーションを企画してみて、どのように感じましたか」の質問には、「レクリエーションを企画してみて、楽しいレクリエーションをするためにチームワークが必要と思った」「学生で企画することは、皆で力を合わせたら難しいことではないと感じた」「目的を達成するためにみんなで協力した。役割分担をしっかり行うことで、活動をスムーズに行うことができた」など、お互いに協力すること、役割を持ちそれぞれが責任をもって取り組むことの大切さを述べている。「皆さんは介護福祉士を目指しています。専門職の視点から、今回の活動を通して、高齢者の個別性を理解できましたか？どのように理解したかを、教えてください」の質問には、「私たちはできるだけ、利用者の希望に答えられるように考えないといけないと思います」「人それぞれに「こうなりたい」「ああなりたい」等のニーズがあるという事が理解できました」など、一人ひとり異なるニーズがあることを理解できている。またレクリエーションの役割として「介護者は高齢者の様々なニーズ、興味、好み、性格、ライフスタイルを尊重することが大切。そうすることで個別性を大切にして高齢者を支援することができる。レクリエーションは常に利用者と会話をする機会を生み出し、その人を知るための手段となりえる」「レクリエーションを通して高齢者を知ることができる。生活支援は身体的なものだけでなく、幸福であることが重要です」などの感想があった。「会員様の、潜在的なニーズ＝喜んでもらえそうな活動は、なんだと思いますか」の質問には、「若者と一緒に活動にとりくむこと」という意見が複数あった。「会員様は、何を求めて、サロンでの活動を楽しみにされていると感じましたか」の質問には、「人とのつながりを求めて活動を楽しみにされていると感じました」等、ふれあい・交流が大切であると感じていることがわかる。「サロン活動に「参加する前」と「参加した

後」の、あなた自身の気持ちの変化を教えてください」の質問には、「参加前は不安や緊張があったが、参加後は笑顔が見れて楽しかった」という意見が複数であった。

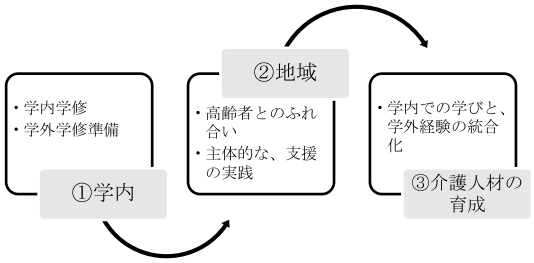
Ⅳ．考察

１回目の訪問後、約半数の学生は事前学習の段階で活動を好意的に受け止め「楽しかった。この活動は、高齢者にとって素晴らしいものだとおもう」「サロンにきて、仲良くなった人もいると聞いたので交流の場としてもいい」「みなさんイキイキ活動されていた。運動をする場にもなるし、仲間も作れるとても良い場だと思った。このような活動が全国で行われるとよいなと思いました」など、サロン活動に共感している。学生の変化がみられる意見として、「活動に参加する前は、よくわからなかった」、「どのような活動か予想がつかない」資料３－（1）と活動参加に消極的だった学生が、「行く前はあまり体操をすることの意義を感じていなかったが、このように週一回 100 歳体操をされているから元気でいれるのだろうと思うと、私も毎日体を動かして健康でいたいと思えるようになった」「活動することによってみんなと触れ合う楽しみがあるなと感じました」と参加後は、サロン活動に対して好感を持っている。資料５－（6）また、「地域活動は活発にしていく方が良い」「学生との交流は必要だと思う」という項目に学生は共感している（資料６－オ・カ）ことから、「高齢者と学生との交流は必要で地域活動は活発にしていく方が良い」という意識の変化が起こっていると考えられる。

風船バレーのレクリエーション提供を行い、その振り返り（資料5）において、レクリエーションを楽しんで頂けて嬉しかったこと、計画の準備と実践はチームワークが大切である事を実感している。学内での学修にとりくみ、そして学外学修のためにクラスメイトと協力しながら準備等を行いながら、学校の外に出ていき、地域においてサロン活動を通して高齢者とのふれ合い、主体的な支援の実践を経験したことは非常に重要である。この「経験」を、庄司はその著書において、「調査対象者の生活を、私たちと同じように、生活を送るものとして理解をする機会を得ることは、有益である」（庄司．p 121）と述べている。学内での学びと、学外経験を統合化することで、介護人材が育っていくということがいえる。（図１）また、このことは「地域活動を通して介護人材が育っていく」と言い換えることもできる。中井は「能動的な学習を通して幅広い能力の育成が期待されている。その一つは、問題解決能力などの専門的知識の活用です」（中井．2016. p 10）と述べている。サロン会員に「喜んでいただける支援」は何かを学生が考え、その提供を通してサロン活動を主体的に経験するなかで、支援の対象者に喜んでいただけるには何が必要なのか「考える方法」を学修するきっかけになったと考える。このことから、座学だけでなく実践をすることが、学修において重要だということが理解できる。

授業の中で専門職同士の連携や協働の教授は多い。しかし実際にサービスを企画し提供することは実習の中でも体験することは難しい。卒業後、施設においてレクリエーションを企画し運営することはこれからあるだろうが、お互いに力を合わせ、実践し、その成功を共感・共有できる体験をすることは非常に重要な経験となる。筆者の経験であるが、レクリエーション活動がマンネリ化しルーティン的に行う様子を実務の中で目にすることがあった。もし彼らが将来そのような場面に遭遇しても、今回の活動での体験を思い出し、楽しい活動の提供をできる専門職になってほしいと願う。

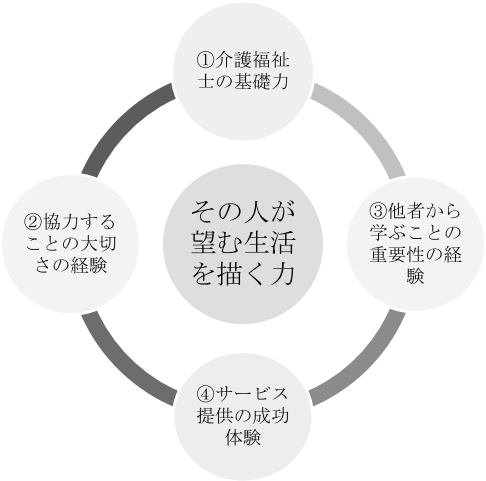
図１　学内学修と地域活動の関係



学校で学修する「介護福祉士としての基礎力」をつけながら学外での、地域活動を通して他者（クラスメイト）と協力することの大切さの体験、他者（サロン会員）から、学ぶことの重要性の体験、サービス提供（レクリエーション提供）の成功を体験する。この成功体験は、「その人（施設入所者・サロン会員等）が、望む生活（活動）を描く力（創造／想像力）の基礎力となる」と考える。（図2）この「その人が望む生活を描く力」は、介護人材養成において、と

ても大切な内容であり、これからもその、教育内容を改善し、質を高めていくことも重要な課題である。

図２　利用者ニーズを描くための学修経験



「レクリエーションを通して高齢者を知ることができる。生活支援は身体的なものだけでなく、幸福であることが重要です」という感想から、介護福祉士として提供すべきことは「幸福」だと考え、レクリエーションをその手段としてとらえることができている学生がいることがわかる。日本介護福祉士会倫理綱領には、その目指すべき姿として「介護福祉士は、暮らしを支える視点から利用者の真のニーズを受け止め、それを代弁していくことも重要な役割である」と記述されている。介護福祉士の視点から「高齢者の個別性」を理解できましたかという質問に、「趣味・嗜好を知る必要がある」「一人ひとり希望が違う」資料５－（5）と学生は答えている。サロン活動での会員の個別性を理解しながら、会員がもつ潜在的なニーズを予想したうえで､対象者の「幸福」をどのようにしたら達成できるのかを考える力は、介護福祉士の専門性として非常に重要な柱となる。「施設利用者の生活支援において、地域高齢者の個別性を知る必要がある」という項目に「そう思う」と学生全員が回答していることから（資料６－キ）サロン活動を通してその理解が深めることができたと考える。

Ⅴ．結論

学生が地域社会に出てサロン活動に参加する事によって「高齢者と学生との交流は必要で地域活動は活発にしていく方が良い」という意識の変化がみられ、レクリエーション提供を経験しながら、どのようにしたら喜んで頂けるだろうかと考え、支援提供を実践したことは、「その人が望む生活を描く力」の基礎となり、将来介護福祉士として施設において生活支援を行う際に「施設利用者の生活支援において、地域高齢者の個別性をしる必要がある」ことが大切であることの理解を深めることができたと考える。

Ⅵ．おわりに

地域サロン活動の経験を介護福祉士としてどのように捉え、今後に活かしてことができるかを自ら考えレポートに記述できる学生が数名しかいなかった。「学生自身に気付かせる教育をすること」が、今後の学修指導における筆者の課題であると考えている。一部の学生の意見であるが「利用者が施設で何がしたいかアンケートをとる。そのことによってその人がしたい事を見つけ、施設での生活を少しでも幸せにと感じてもらえるのではないか」という意見があった。学修で得た知識を実践し、失敗や成功を重ねながら介護福祉士としての専門性をどのようにして高めていくのかを「考えることができる人材の芽を育む」こともこれからの課題である。

注

1）高齢社会白書（2020）　内閣府　ｐ 2-15
2）介護保険法改正（H26　2014）厚生労働省　ｐ３
3）佐世保市社会福祉協議会
http://www.sasebo-shakyo.or.jp/welfare/f_salon-2/

引用文献

森常人（2014）「ふれあい・いきいきサロン」の参加者評価の分析に関する一考察
関西外国語大学　研究論集第100号　258
中井俊樹（2016）「アクティブラーニング」玉川大学出版部　10
庄司知恵子（2017）『「実践」が〈理論〉をコントロールするのであって、〈理論〉が「実践」をコントロールするのではない』星雲社　121

参考文献

合津千香（2013）「介護福祉学生が「地域」について学ぶ意義と課題」

松本短期大学研究紀要（22）25-33
正保里恵子（2017）「PBL 型学習形態としての「学生サロン元気」の学習効果と展望」 帯広大谷短期大学地域連携センター紀要（第 4 号）63-71
小西亘（2014）「レクリエーション支援の基礎」
岩間伸之･原田正樹（2019）「地域福祉援助をつかむ」

資料 1）サロン会員アンケート①
（会員が自らアンケート用紙に記入）

１回目訪問時のサロン会員構成
（　　）の人数はアンケート②より集計

	50 代	60 代	70 代	80 代	未回答
男	0	(1)	1	(1)	
女	0	(4)	6（3）	4	
総数	0	5	10	5	4

※アンケート① 14 名② 10 名　計 24 名

(1) 100 歳体操を何で知りましたか（複数回答あり）

新聞	公民館	HP	口コミ	その他
0	7	0	13	5

その他　町内会、とびこみ、回覧板、市報

(2) 100 歳体操の活動に参加してみようと思われたきっかけは何ですか（複数回答あり）

新聞	チラシ	友人・知人の紹介	その他
0	2	15	8

(3) 月に何回位、100 歳体操に参加されていますか

1 回	2 回	3 回	4 回
2	2	4	16

(4) どのくらいの期間、100 歳体操に取り組まれていますか

1 カ月未満	3 カ月未満	6 カ月未満	1 年以上
1	4	3	15

(5) 100 歳体操に参加されて、ご自身にどの様な変化がありましたか
・楽しく過ごせる
・気分が晴れ晴れ
・筋力がついた
・会員に会うこと触れ合いが楽しみ
・体が軽くなった・変化なし
・地域住民とのふれあいができた
・心がおだやかになった以前は閉じこもりがちであった

(6) これから、やってみたい活動（レクリエーションなど）は何がありますか
・100歳体操の継続
・何でもやりたい
・少しずつ動きを早めてダンスなど取り入れたらどうであろうか
・軽く身体を動かす事

資料2) サロン会員アンケート②
(学生から会員への聞き取り調査)
(未回答除く)

	50代	60代	70代	80代
男	0	1		1
女	0	4	3	
総数	0	5	3	1

※アンケート②　計10名

(1) 100歳体操の「魅力」を教えて頂けますか
（複数回答可）
・体が楽になる
・スポーツがすきである
・体を動かすことができる
・血流がよくなる
・運動不足解消になる
・ゆっくりできる。転倒防止になる
・健康の為にしている
・健康維持
・健康にいい話などができる
・一緒にだったら頑張れる
・会員とのコニュニケーションができる
・友達に誘われたから、楽しく続けれそうである
・前向きになる
・友達ができる
・仲間づくりができる。
・会員に会う事が楽しみ
・家だと会話がすくなくなる
・外に出ることで刺激をもらえる

(2) 100歳体操を取組まれて、「良かったこと」は何がありますか
（複数回答可）
・体が楽になった
・健康を維持できている
・目、肩などの悪い所を教えてくれる
・椅子からの立ち上がりが自然にできるようになってよかった。
・家で出来ることを教えてくれる。
・外に出る機会ができた。
・友達になれるところ。交流ができる
・友達ができる。みんなが明るく積極的。

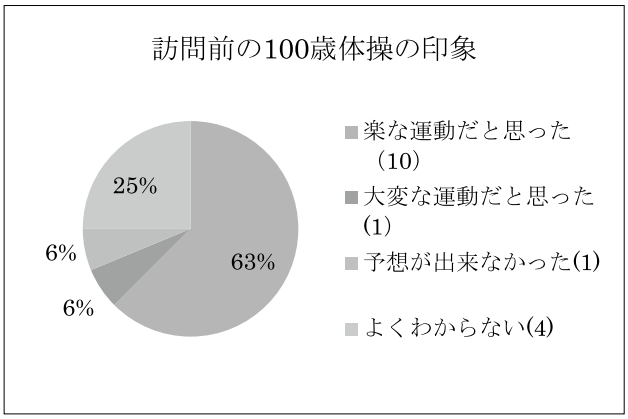
(3) これから、「やってみたい活動（レクリエーションなど)」は何がありますか
・体を動かす活動
・リハビリ器具を使ってやってみたい
・ウクレレを聴くだけがいい
・カムカム体操
・チベット体操（みんなに広めたい）
・料理（和食、おかし）
・歌を歌うこと
・今で満足、特にない

(4)「学生と一緒に、やってみたら楽しそうな活動」は何がありますか
・手をつないで歌う
　⇒理由：ふれあい
・バッコン
　⇒理由：経験している。以前大会にも出ている
・お手玉
・フォークダンス
　⇒理由：なつかしいから。
・脳トレーニング
　⇒理由：少しでも脳を若返らせたい。
・学んでいる事を知りたい
　⇒理由：学生と関わりコミュニケーションをとりたい
・学生が考えてくれたらそれを一緒にしたい

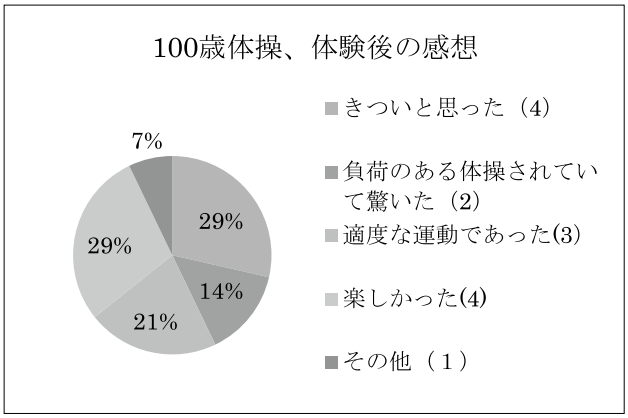
資料 3）学生アンケート①
（100 歳体操、体験後の学生感想）

（1）活動に参加する前、100 歳体操について、どのような印象がありましたか

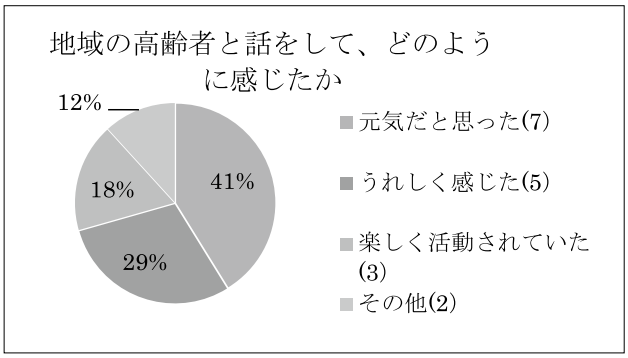
（　）は解答人数



（2）100 歳体操をして、どのように感じましたか

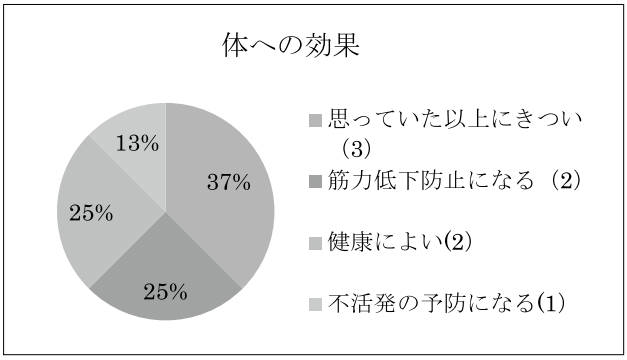


（3）地域の高齢者と話をして、どのように感じましたか

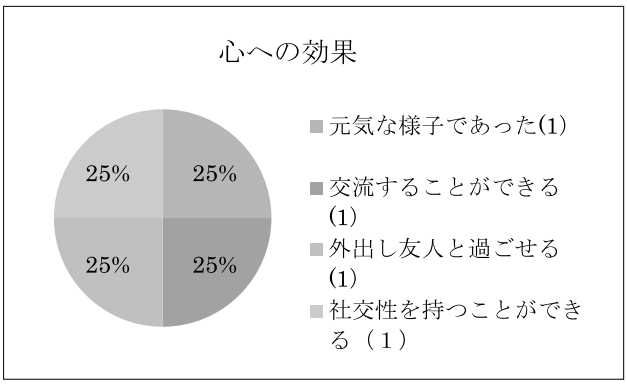


（4）100 歳体操の効果について

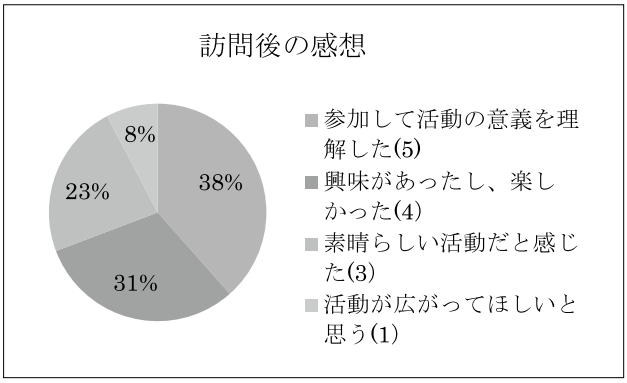
（ｉ）体への効果



（ⅱ）心への効果



（5）訪問後の学生自身の変化や感想



資料4）サロン会員アンケート③
（風船バレー実施後のアンケート）

アンケート③　集計

	50代	60代	70代	80代
男	00	0	3	0
女	0	1	11	1
総数	0	1	14	1

※アンケート③　計16名

（1）風船バレーの感想をお聞かせください

楽しかった	普通	楽しくなかった	その他
16	0	0	0

・一緒にゲームができた
・自然と笑顔になった
・ルールが簡単だった
・体操も良い、童心に返ってよかった
・久しぶりにボール遊びができた

（2）今後、学生と一緒に、地域活動ができるとしたら何がしたいですか

是非やってみたい	やってみたい	どちらでもよい	その他
11	4	1	0

・サロンでしているレクリエーションをしたい
・話すだけで楽しい
・クイズ
・しりとり
・お手玉

（3）ア～カについて、「サロン活動」について質問です。

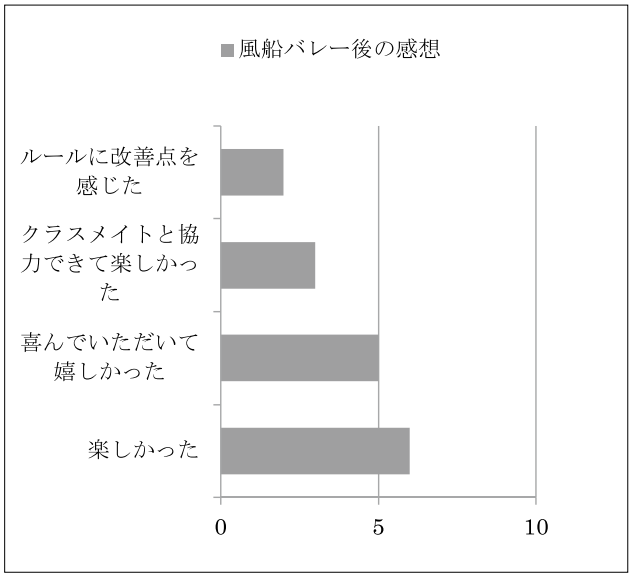
ア　活動で、筋力がついた
イ　活動で前向きな気持ちになった
ウ　会話することが楽しみである
エ　友人、知人ができる
オ　外出することが増えた
カ　健康になった

項目	そう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
ア	6	5	5	0	0
イ	12	3	0	0	0
ウ	14	1	0	0	0
エ	14	1	0	0	0
オ	13	2	0	0	0
カ	9	4	1	0	0

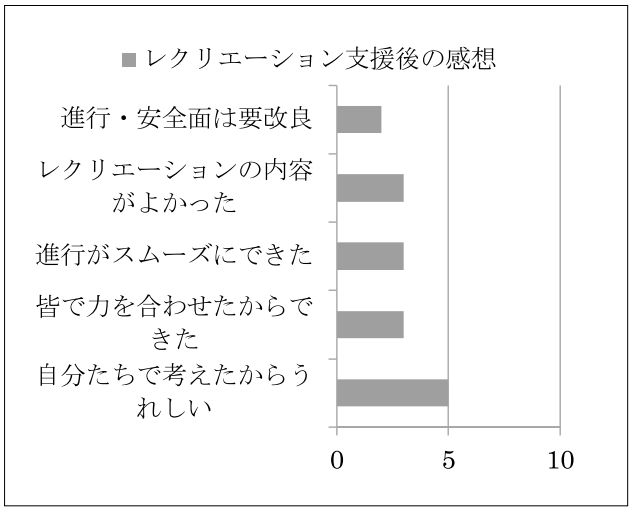
（4）地域の活動を、今後、更に良くして行く為には、どの様な工夫・改善が必要と思いますか
・子ども、青年、老人が楽しく話をして体が動かせるサークルが欲しい
・面白いレクリエーションで人を集める
・色んな人との交流
・今のままでよい

資料5）学生アンケート②
（風船バレー実施後の学生感想）

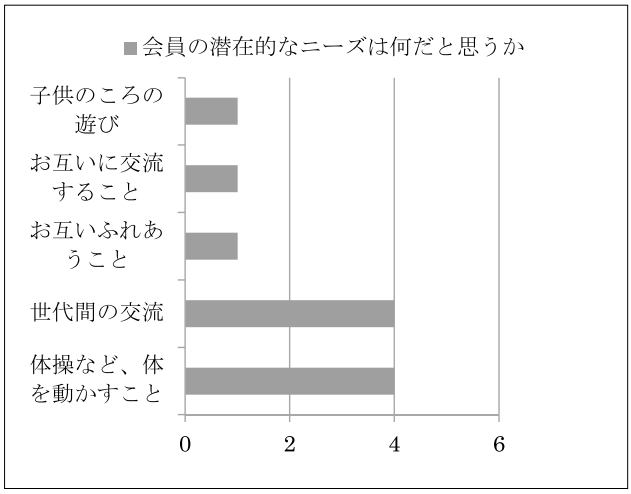
（1）学生で考えたレクリエーションをしてみて、どのように感じましたか



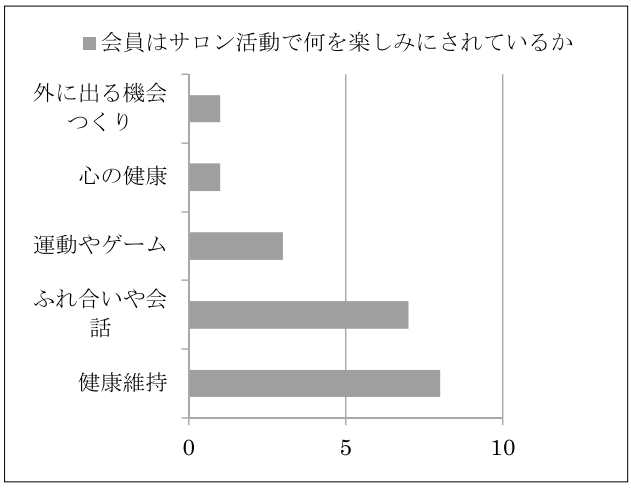
(2) レクリエーションを企画してみて、どのように感じましたか



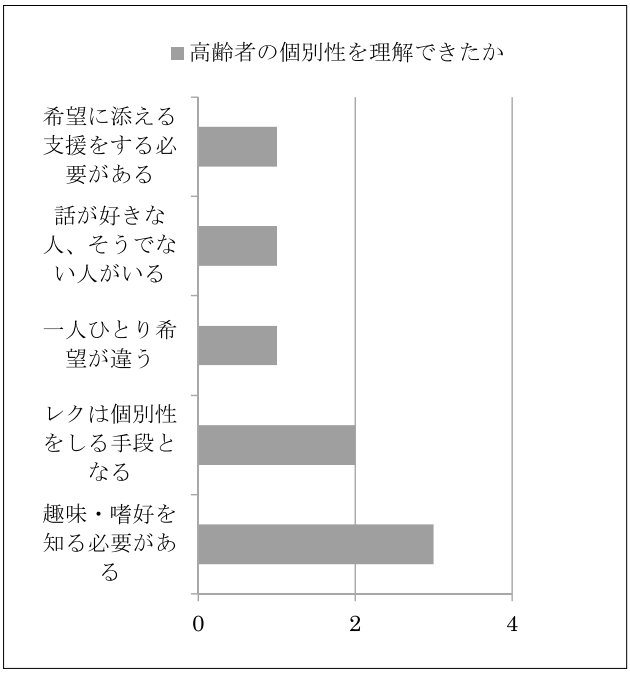
(3) サロン会員の、「潜在的なニーズ＝喜んでもらえる活動」は、なんだと思いますか



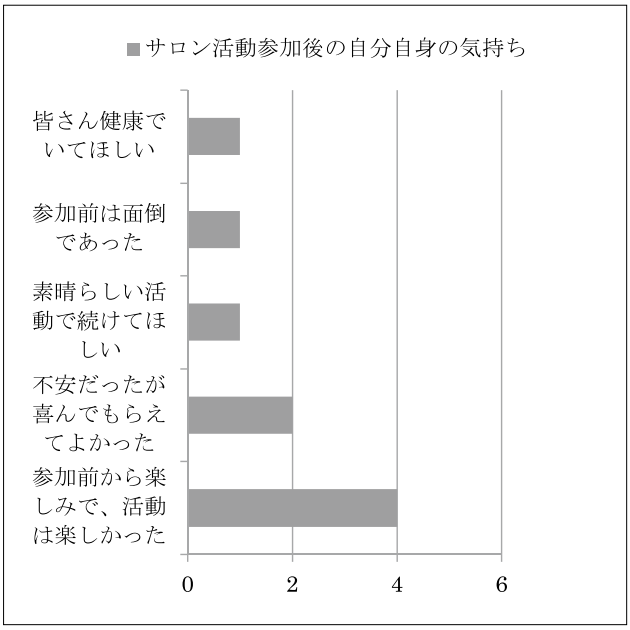
(4) 会員はサロン活動で何を楽しみにされていると感じましたか



(5) 介護福祉士の視点から「高齢者の個別性」を理解できましたか



(6) サロン活動に「参加する前」と「参加した後」の、あなた自身の気持ちの変化を教えてください



(7) 地域の活動を今後更に良くしていく為にどの様な工夫・改善が必要と思いますか

・同じレクリエーションの繰り返しでなく、飽きがこない工夫をする
・高齢者がもっと社会に出て社会貢献のための交流が大事

・地域の方々が気軽に楽しく参加できるために、行政がもっと高齢者の為に何が必要かを考えるべきである
・活動を広めることが大切
・運動ではなくても楽しめるレクリエーションをしたら良いとおもう
・私たち、若い世代が活動を広げていくこと。広げて知ってもらうこと
・サロン活動の内容をＴＶや広報誌等で紹介・募集することでもっと人が増え、今よりも楽しい活動が出来るのではないか
・触れ合いの場をもっと多くしていく
・地域の人たちが、活動に参加する意欲を高める必要がある
・高齢者のための、良い計画を考える事
・沢山の企画が必要
・どのような活動をしたいか調べ、安全・安心なレクリエーションの提供が必要

(8) その他（自由記述）
・沢山の仲間が増えるのが良い
・施設入所者が多い中で健康で自立した生活を送る為には、地域活動の参加で高齢者がいつまでも元気でなければならない
・地域・行政共に今後の地域活動に関して考えさせられた
・レクリエーションのマンネリでは年々参加者も減るのではないかと思った
・サロン活動への参加は、2回だけだったが充実していた
・健康寿命は人としての楽しみにつながる

資料6）学生アンケート③
（風船バレー実施後の学生感想）

「サロン活動」で経験したレクリエーションについて質問です。ア～キのそれぞれについて、1～5のうち当てはまる番号に一つ○をつけてください

ア．活動で、以前より高齢者を知ることができた
イ．高齢者を身近に感じる、きっかけになった
ウ．地域に暮らす高齢者に興味が出た
エ．また機会があれば、一緒に活動したい
オ．学生との交流は必要だと思う
カ．地域活動は活発にしていく方がよい
キ．施設利用者の生活支援において、地域高齢者の個別性を知る必要がある

	1 そう思う	2 まあそう思う	3 どちらともいえない	4 あまりそう思わない	5 そう思わない
ア	9	3	1	0	0
イ	11	2	0	0	0
ウ	10	2	1	0	0
エ	12	1	0	0	0
オ	12	1	0	0	0
カ	13	0	0	0	0
キ	13	0	0	0	0